

藤並の森

vol.
103
2023.12

(作家)

リレー随筆

二十年の時の江戸の遠景

辻堂 魁



『偉大なるギャツビ』のフィッツ・ジエラルドが、十代で世に出た者は運に恵まれたと言い、二十代は自己の才能を上げ、三十代では努力を理由にすると、そんなことを描いていた本を読んだ記憶がある。どの本だったか思い出せないが、それを読んだのが二十代の後半で、作家になる希みを捨てきれずにいた中年の文学青年だったわたしは、そろそろ諦めどきかと、気が減入つたことを覚えている。

最初の時代小説『夜叉萬同心 冬かげろう』を描いたのは、早や老年の六十歳を迎える春である。出版不況が言われ始めたころで、書き下ろしの時代小説文庫が中高年を中心には読者を得て、小説の出版に経験が乏しくとも、時代小説文庫に限定してシリーズ化に参入している版元が幾社かあつた。失礼な言い方をお許し願いたいが、そういう出版社なら、作家としての名がなくとも、それなりの時代小説が描ければ、作家の端くれに名を連ねることができるのではないかと思つた。子供のころはチャンバラごっこで遊んだし、町の映画館

で時代劇をわくわくときどき見て観た。老いた今でも時代劇は好きである。その子供のころのわくわくときどきを物語にすれば、それなりの時代小説が描けるのではないかとだ。

東京に出て二十年ほどがたつた四十歳前後のころだ。当時、わたしは、埼玉県に居住するある作家の原稿取りに、東武東上線沿線の武藏嵐山という町へ、池袋から急行電車に乗つて出かけた。急行電車が埼玉県中西部の郊外を、それこそガーンという感じで突っ走つて、車窓から見るか遠くに見え始めた秩父方面の青い山並を眺めたとき、彼方の山嶺が、緑ではなく青く映る関東平野の広さに改めて気づかされた。そのときわたしは、そうか、これが江戸の景色なのかなと思ったのだ。

高知県に生まれ、幼いころ大阪へ出て大阪郊外の町で育つたわしが覚えている景色には、必ず緑の山並があつた。東京暮らしを始めて、周囲のどこにも

ていたが、ほんの二百年かそこら前の江戸時代、この関東で暮らしていた人々が見ていた景色がこれかと気づき、急行電車に乗つているわたし自身が、二百年前の江戸時代の武州の地へ向かっているような空想に、うつとりと耽つたのだった。

それは例えば、秩父の山村で生まれ育つた十三歳の少年が、親元を離れ遠い江戸の商家に小僧奉公を始めるとき、秩父山系の峰から関東の広大な地平を初めて眺め、その地平の果ての江戸へはるばると旅立つ不安と懼き、心細さと寂しさ、それを我慢する小さな勇気と、ほんのわずかな希望に通ずる空想だったように、老いたわたしは今想像する。

あのときわたしは、いつか作家になつて江戸時代を舞台の小説を描くことがあるなら、この江戸の景色は描写しなければなと思った。それから実際に本を描くまで、さらに二十年の『時』がかかつたのだが。

Report

めざめる探偵たち

文豪ストレイドッグス

BUNGO STRAY DOGS

高知県立文学館

好評
開催中

令和5年10月7日 土 》令和6年1月8日 月 祝

午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

展示のようす

ボーの没日に開幕した「めざめる探偵たち」文豪ストレイドッグス×高知県立文学館」展、おかげさまで好評をいただいており、「文ストの文豪もリアルの文豪も好き。文学に浸ることができました。」「2回目来ました！何度もおきないです。また来ます」などの嬉しい声が寄せられています。

本展では、江戸川乱歩や横溝正史に影響を与えた日本探偵小説の黎明期を支えた高知県出身の文学者・黒岩涙香、馬場孤蝶、森下雨村に焦点をあて、当館所蔵の資料約200点を中心にその業績を紹介しています。

あわせて、大人気作品『文豪ストレイドッグス』との2回目のコラボ展示も開催。本展のために描き下ろされたイラストや、普段は見ることのできない

複製原画、『文豪ストレイドッグス』作中のシーンをイメージ再現したフォトスポットなどを展示しています。

10月8日(日)には湯浅篤志氏(大正文学研究者・「新青年」研究会会員)による記念講演会「日本の探偵小説は、高知から生まれた—涙香、孤蝶、そして雨村の果たした役割—」が開催され、雑誌「新青年」の意義、ヒラヤマ探偵文庫から復刊された孤蝶や雨村作品の魅力など、大変分かりやすく紹介していました。

10月下旬に開催した映画上映会や、それぞれの記念日にちなんで随時開催しているクイズイベント・先着プレゼントDAYも毎回行列ができるほど好評をいただいておりますが、お客様の

探偵小説の元祖エドガー・アラン・ポーの没日に開幕した「めざめる探偵たち」文豪ストレイドッグス×高知県立文学館」展、おかげさまで好評をいただいており、「文ストの文豪もリアルの文豪も好き。文学に浸ることができました。」「2回目来ました！何度もおきないです。また来ます」などの嬉しい声が寄せられています。

本展のために描きおろされたイラスト。「文豪ストレイドッグス」の江戸川乱歩、ボオ、小栗虫太郎が当館常設展を楽しむ観覧しています。
©朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグス製作委員会

あたたかなご協力のもと、混乱もなく実施しています。

また、本展では公益財団法人吉備路文学館や、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターのご協力のもと貴重な資料や写真などを展示しています。特に、吉備路文学館からお借りした横溝正史の直筆原稿「金田一耕助誕生記」と「探偵小説昔話原稿・補遺」、小栗虫太郎と「ピンチヒッター」は、探偵ファンはもとより文ストファンの皆さんにもじっくり見ていただきたい大変興味深い資料です。

本展で様々な発見をしていただき、古今の探偵作品に興味をもつていただければ、次は観覧したお客様自身の中から新しい探偵(作品)がめざめるかもしれません、そう願いつつ皆さまのお越しをお待ちしております。展示は1月8日まで開催しており、ファインナーリイベントには『文豪ストレイドッグス』原作者の朝霧カフカ氏を招いてトークも予定しています。ぜひご期待ください。

(学芸課／福富陽子)



クイズイベントのようす

時代小説と歴史小説展

—江戸時代を生きる、今を生きる—

高知県立文学館では、令和6年1月20日（土）から「時代小説と歴史小説展—江戸時代を生きる、今を生きる」を開催します。

市井の人々が知恵や機転で権力に立ち向かう痛快な物語や、華麗な剣さばきが魅力の時代小説、史実や歴史上の人物を題材として描かれる歴史小説。これらの作品は義理と人情、志と野望、時に非業な運命など様々な美意識や人間模様を映し出しています。

今回の展覧会では「江戸時代を生きる、今を生きる」をテーマに、江戸時代を五つの区分にわけ、歴史の流れに沿って時代小説・歴史小説をご紹介します。

同じ時代を描きながらも、作家・作品によってそこに描かれるものは様々です。

時代の流れを通してそれらの作品を眺めるとき、何が見えてくるのでしょうか。

作家は「江戸」という時代を通して



「東都名所 永代橋深川新地」初代歌川広重画／国立国会図書館デジタルコレクション

て何を伝えたかったのか。江戸に生きた人々を描きながら、現代を生きる我々に伝えるメッセージとは何かを探ります。

高知県は多くの時代小説・歴史小説作家を輩出しています。

深川に生きる人々の姿を描いた山本一力『あかね空』『蒼龍』、江戸の町を颯爽と駆け抜け悪を斬る、辻堂魁『風の市兵衛』シリーズ、優しいまなざしで、江戸に生きる女性を救う、藤原紺沙子『隅田川御用帳』シリーズ、『藍染袴お匙帖』シリーズなどの時代小説。

そして、江戸時代初期の土佐藩政を掌つた野中兼山の生涯を描いた田岡典夫作『小説野中兼山』、兼山亡き後の野中一族の幽囚の月女』の他、井伏鱒二『ジョン萬次郎漂流記』、司馬遼太郎『龍馬がゆく』、坂崎紫瀾『汗血千里駒』などの歴史小説。

これらの作品を、作家の直筆原稿などの創作資料や作品に登場する歴史上の人物に関する一次資料などとともにご紹介します。



「龍馬がゆく」挿絵画稿／岩田専太郎画 新収蔵資料



アリスの世界展

—不思議な冒険の招待状—報告

アリスの世界展、9月18日(月・祝)に無事閉幕しました。

今回の展示は、フォトスポットでも
あつた海洋堂のフィギュアが非常に好
評で、ご年配の方からは、若い世代にも
文学に興味を持つてもらえてとても良
いというご意見をいただきました。ト
リックアートは気軽に物語世界に入り

加え、たくさんの本を比べると時代ごとに「かわいい」が見えてきて、大変興味深いものとなりました。お客様からは「アリスの世界に入り込んだ」本を読んでみたくなつた「日本を回るべき展示」などと評価いただきました。



記念対談のようす



団体プログラムの様子

ました。クイズイベントに参加くださった常連のお客様からは、いつも文学館のイベントを楽しみにしていふとお声がけいただき、こちらも励まされる思いでした。展示解説参加者が夏の企画展の中ではかなり多かったのも印象的です。展覧会終了間際では20名前後の方々が聞きに来てください、熱意に圧倒されました。ファインライベントの最終日は、展覧会中最多くの来館者数で締めくくられました。



ケリウムの作品

幅広い人々に楽しんでいただけ、充実した内容となつたと思います。労を惜しまずご尽力くださった監修の先生方、海洋堂をはじめ、ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

年、千葉県習志野市に生まれ、三歳から高校卒業まで高知県中村市（現・四十万市）で育ちます。大学卒業後、広告会社のコピーライターとして働くかたわら、作歌を開始。平成三〇（二〇一八）年、ツイッター（現X）上で「ほんとうにあたしでいいの？ ずばらだし、傘もこんなにをくさんあるし」という短歌が話題となります。令和四（二〇二二）年、第一歌集『水上バス浅草行き』を出版。歌集では異例の大ヒットとなりました。

岡本さんの歌はとてもわかりやすい言葉で詠まれており、何気ない日先に挙げた歌からもわかる通り、

前回の館報でもご紹介しましたが、秋に、常設展の入り口を入つてすぐのところにある「現在の作家コーナー」を入替することになりました。今回は、評論家として知られる門田隆将さんから、歌集『水上芭ス浅草行き』で話題の歌人・岡本真帆さんに入れ替えします。

手の等身大の姿が率直に描かれて
いるので、歌に自分の思い出を重ね
て共感する人も多いのではないで
しょうか。

「平日の明るいうちからビール飲む
ごらんよビールこれが夏だよ
と、夏の真っ昼間から飲んでしまう
自由さに共感したり憧れたり、「犬
だけがただうれしそう脱走の果て
に疲れた家族を前に」の歌からその
情景を想像してクスッと笑ってし
まつたり、「ありえないくらい眩し
く笑うから好きのかわりに夏だと
言つた」を見て、若かりし日を思い
出して切なくなつたり……。

今回の展示では、話題となつた第一歌集『水上バス浅草行き』などの他、パネルでいくつかの歌を紹介します。この展示が、岡本さんの瑞々しい素敵な歌の数々に触れるきっかけとなれば嬉しく思います。

The illustration features two rows of stylized trees. The top row consists of five trees: a red conifer on the left, a brown tree with a red peak in the center, a yellow tree to its right, and two more brown trees on the far right. The bottom row has seven trees: a green conifer on the far left, followed by a cluster of three small trees in brown, orange, and yellow. To the right of this cluster are four more trees in various colors and styles, including a large brown leaf-shaped tree and several smaller, more abstract trees.

変わる常設展

土佐文学さんぽ

近道一郎、雄と邂逅 宮地尾平 谷

索すること何十年。ついに「監修・平尾道雄編集・解説・宮地佐一郎」「光風社」(一一五〇ページ)の大著を仕上げた。続いて「坂本龍馬写真集」(新人物往来社)や「中岡慎太郎全集」(頸草社書房)(二六七ページ)を完成したが、長期にわたる情熱と信念には、驚嘆されるものであった。

完成した大著を、宮地は司馬遼太郎に贈呈した。司馬は「私の小説などは、すぐ忘れ去られるものです。しかしながら仕事は違う。未来永劫に残り、後世に感謝される仕事です。よくぞなさつた」と語ったと言ふ。(宮地の直話)

人間の生涯は、「他人との出会いの連続」である。中でも思いがけない尊い人の出会いを「邂逅」と言う。宮地は尊い邂逅を得た人であった。それは史家・平尾道雄という存在だ。

宮地は高知市朝倉の人。旧制城東中学校(現追手前高)から高知師範学校をへて、卒業後、潮江中学校などで教職についた。幼少期から文学青年で早くから詩を書き、吉本青司、大川宣純などと同人。やがて上京して文学で身を立てようとして、法政大学国文科を卒業、亀井勝一郎、大佛次郎に師事する。直木賞候補になった「闘鶏絵図」(七曜社)「宮地家三代日記」(審美社)「菊酒」(光風社書店)などを出版、土佐物を書く作家として知られた。その時、土佐で会ったのが、史家・平尾道雄である。

「私は何とかして「坂本龍馬全集」を作りたい。しかし、もう歳をとつて体がきかなくなつた。あなたが、是非やって欲しい。私のできることはなんでもする」という言葉である。若い宮地も段々とその気になり、「坂本龍馬全集」の大業に取り組んだ。北海道から九州まで、新資料が出たと聞くと、すぐ飛んで行って探



高知市東久万にある平尾道雄の墓。
宮地佐一郎が東京から帰郷。「坂本龍馬全集」「中岡慎太郎全集」の完成を墓前に報告した。(筆者同伴)

その他、啓蒙書では「坂本龍馬・男の行動論」「坂本龍馬・幕末風雲の夢」「日本ではじめて株式会社を創った男・坂本龍馬」、土佐歴史散歩「大佛次郎」など。文庫本では「龍馬の手紙」「坂本龍馬・海援隊誕生記」「龍馬百話」「長宗我部元親」など多数。高知県も感謝して「高知県特別文化賞」を受けたが、病歎をおして帰郷、その数カ月後に逝去した。(郷土史家)

18 昭和30年)は、高知県西部、宿毛生まれの歌人。戦前から広くその名を知られ、戦後は歌誌「定型律」「花宴」を創刊し、中心的役割を担いました。また、女性歌人たちが結社を超えて結集し、戦後短歌史に特筆すべき足跡を残した「女人短歌」の創刊にも尽力、同誌の編集兼発行人を務めました。

右の書簡は、前述の各誌に集った歌人の一人、平中歳子(1910~1988)に宛てた北見志保子(明治43~昭和63)に宛てた北見志保子の書簡。平中は京都市の生まれで、この書簡が送られた當時も同市に在住。自宅は定型律短歌会や女人短歌会の支部で、歌会の場となり、北見が京都を訪れた際に宿泊先ともなっていました。書簡は、師から弟子への戒めの言葉が始まっています。

御手紙ありがたく拝見しました。

序文はいつまでにかけばよいのですか。
歌を作る暇をしばしといふはまこと

索すること何十年。ついに「監修・平尾道雄編集・解説・宮地佐一郎」「光風社」(一一五〇ページ)の大著を仕上げた。続いて「坂本龍馬写真集」(新人物往来社)や「中岡慎太郎全集」(頸草社書房)(二六七ページ)を完成したが、長期にわたる情熱と信念には、驚嘆されるものであった。

寄贈資料から――
平中歳子宛北見志保子書簡
1948(昭和23)年6月25日付
中城正堯氏寄贈
ペン書



(学芸課／小松路代)

資料受贈報告

受贈報告

(令和5年8月~11月)敬称略

中脇初枝「伝言」

講談社刊

柴田ケイコ・パンどろぼうとほつかほつか

カドカワ刊

湯浅篤志・林檎の種

エドウインペアード

著鳥場孤蝶記

ヒラヤマ探偵文庫刊

祥伝社・母子草風の市兵衛

辻堂魁著

ケンダル・ハイツマン「ENDURING POST-

WAR YASUOKA SHOTARO AND LITERARY

MEMORY IN JAPAN Kendall Heitzman著

Vanderbilt University Press刊

鈴木美智子「READING THE KIMONO IN

TWENTIETH-CENTURY JAPANESE LITER-

ATURE AND FILM

鈴木美智子著

NHK出版編刊

清水書院・関東大震災日記―文豪たちの九

森岡隆著 筑波大学大学院人間総合科学

研究科芸術専攻刊他

NHK出版「NHK俳句」2023年8月号

月日) 石井正己編 清水書院刊

▼鶴見慎太郎全集」(中岡慎太郎全集)

伊崎修通編

にか。
一日のお暇はのちの十年の悔になることを忘れたまぶな。

一方で、平中の元気な様子に安心。自身も例年に比べて体調が良く、膝の痛みくらいですみそうだと記し、我が身を材に、戯れに詠んだと思われる歌5首を書き送っています。最後の1首に「膝のばしあふ」とあり、老いやくなかにも穏やかな暮らせました。いずれも北見晩年のもので、病を抱えながらも歌誌の編集、運営に心血を注ぎ、後進の育成に奔走した姿が浮かび上がります。

中城氏からは、平中歳子宛書簡を中心とした。北見志保子関係書簡40通をご寄贈いたしました。いざれも北見晩年のもので、病を抱えながらも歌誌の編集、運営に心血を注ぎ、後進の育成に奔走した姿が浮かび上がります。

中城氏からは、平中歳子宛書簡を中心とした。北見志保子関係書簡40通をご寄贈いたしました。いざれも北見晩年のもので、病を抱えながらも歌誌の編集、運営に心血を注ぎ、後進の育成に奔走した姿が浮かび上がります。

窮屈舍

追悼・市原麟一郎先生



第10回ニューエルダーシチズン大賞入賞の記念祝賀会にて

9月24日に101歳でご逝去された市原麟一郎先生。高知県立文学館は言葉ではとてもいい表すことができないほどたくさんのお力添えをいただいてきました。市原先生と当館の出会いは、平成13年に開催した企画展「土佐のむかしばなしと伝説」展のとき。市原先生の全面的なご協力のもとで展覧会を行い、この時を契機に当館に市原麟一郎先生を主宰とする「紙芝居研究会(現「語りと紙芝居の会」)が発足。以後深く、長いお付き合いとなりました。

毎月第2土曜日に開かれる同会

では市原先生を囲んで土佐民話を学び、紙芝居を披露する、楽しく有意義な時間を過ごしてきました。同会は現在も市原先生の教えを大切

に、会員さんたちが活動を続けています。

平成23年には市原先生主宰の「土佐民話の会」創立40周年、「語りと紙芝居の会」創立10周年、そして、卒寿という節目の年を記念して、「市原麟一郎よみがえれ土佐民話展」を開催。深い愛情を持つてはぐくんできた民話紙芝居、戦争民話、神仏ごりやく巡り、土佐のおどけ者などのテーマを中心

に、須崎工業学校(現・須崎総合高校)教員時代から50年に渡る市原先生のお仕事の集大成をご紹介しました。展覧会場横にしつらえた「書斎」には毎日市原先生ご本人が座り、来館者をお迎えくださいました。

私個人の思い出としては、県内各地の小学校や幼稚園・保育園に一緒に紙芝居公演に行かせていただきたいこと、北川村で市原先生と一緒に紙芝居を作成したことなど、本当に大切な時間を過ごさせていただきました。

市原先生が守り、伝え続けてくれた土佐民話の灯を絶やすことないよう、これからも高知県立文学館職員一同力を合わせて励んでいきます。市原先生の民話一筋のお仕事に心から感謝と尊敬の念を捧げるとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

(学芸課／岡本美和)

第26回 児童生徒文学作品朗読コンクール 県審査・記念講演会



高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、児童生徒文学作品朗読コンクールを実施しております。本年度で26回を迎えました。11月5日(日)の県審査には、西部・東部・高知の各地区審査を通過した23名の小・中学生が登壇しました。会場が高知城ホールとなり、地区審査の時よりも大きなホールでの朗読発表となりましたが、緊張感の中にも、自分の思いを伝えようとするひたむきさが伝わってきました。児童生徒の皆さん、朗読から、一人一人の文学作品の解釈や声の出し方、地の文と会話文の表現の仕方の工夫など、多くのことに気づかされました。作品の中の一部分を切り取つての朗読ですが、登場人物の心の動きや作品のメッセージなど深く作品全体を理解していると感じる素晴らしいものでした。



県審査の様子

審査結果は以下のとおりです。(敬称略)

金賞

高知大学教育学部附属中学校
1学年 門田 麻汐

特別賞

堀井真吾賞 高知市立初月小学校
6学年 山本 明日香

銀賞

黒潮町立南郷小学校
5学年 武政 優花

郷土文学賞

高知大学教育学部附属小学校
3学年 五百藏 慶世

銅賞

土佐市立高岡第一小学校
3学年 時久 帆奈美

黒潮町立南郷小学校
3学年 大西 将仁

高知大学教育学部附属小学校
5学年 岡村 咲希

高知大学教育学部附属小学校
6学年 谷脇 百合子

土佐中学校
3学年 栗野 彩羽

ただきました。また、実際の朗読も聞かせていただき、会場の聴衆はその世界に引き込まれていきました。朗読作品選びに関する質問などにも、とても丁寧に答えていたとになりました。

最後になりましたが、参加してくださった児童生徒の皆さんをはじめ、保護者の皆様、学校関係者の皆様、関係各所の皆様のご協力を得て、朗読コンクールが開催できましたことを、心から感謝申し上げます。

(学芸課長／織田敦子)

※上記のほか、12名の方が入賞されました。

ショッピングより



藤並の森にも落ち葉が降り始め、いよいよ冬の訪れを感じます。街中は早くもクリスマスのイルミネーションが飾られはじめました。

文学館では、10月7日より『めざめる探偵たち～文豪ストレイドッグス×高知県立文学館～』展を開催しており、たくさんのお客様にご来館頂いています。

ミュージアムショップでも、書籍やグッズなどの商品を販売しています。

その中でも、オリジナルグッズのポストカード、クリアファイル、ポスターは大変ご好評頂いており、お客様の嬉しそうな笑顔を多く拝見します。

そして、ミステリの埋もれかけた古典名作を紹介しているヒラヤマ探偵文庫から馬場弧蝶、森下雨村の貴重な書籍4冊も販売しています。(ヒラヤマ探偵文庫の書籍は企画展終了後もショップにて取扱いを致します)

当館にお越しの際はミュージアムショップにもお立ち寄り頂き、ぜひお手にとつてご覧ください。

(総務事業課／海治紫野)

©朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグス製作委員会

館長エッセイ

トピックス

こどものぶんがく室に 秘密基地!?

当館1階「こどものぶんがく室」は、市原麟一郎さんが長年収集した高知の民話はじめ高知県出身の児童文学作家の本を設置しており、積み木のシンボルツリーに見守られながら誰もが本と親しめる空間として、密かな人気スポットとなっています。

この度、「このお部屋で子ども達から沢山のわくわくした想像が生まれますように」とのあたたかなメッセージと共に、絵本作家の柴田ケイコさんから自作の家【わくわく秘密基地】をご寄贈いただきました。中も外も柴田さんの描きおろしイラストで彩られ、まさに当館にしか無い想像力を育める秘密基地となっています。

こども室の奥に設置しているので、来館の際にはぜひお立ち寄りください。
(学芸課／福富陽子)



高知県立文学館カレンダー

12月27日～1月1日は年末年始のため休館致します。

めざめる探偵たち

好評
開催中

文豪ストレイドッグス

BUNGO STRAY DOGS

高知県立文学館

- 会期 令和5年10月7日(土)～令和6年1月8日(月祝)
- 会館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 会場 高知県立文学館 2階 企画展示室
- 観覧料 500円(常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは2ページ目をご覧ください。

お正月をご一緒に♪先着プレゼントday

当日ご観覧いただいた先着100名様に、展覧会ポスター(A2サイズ)と描きおろしイラストのポストカードをプレゼントします。

- 開催日 令和6年1月2日(火)、3日(水)
各日とも10:00～16:00 ※申込不要
- 参加費 要当日観覧券



鬼才江戸川乱歩出現の前夜

めざめる探偵たち

文豪ストレイドッグス × 高知県立文学館

10月7日(土)～1月8日(月・祝)

高知県立文学館2F 企画展示室

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休

観覧料 500円(常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料



©朝霧カフカ・春河35 / KADOKAWA / 文豪ストレイドッグス製作委員会

次回開催

時代小説と歴史小説展 —江戸時代を生きる、今を生きる—

- 会期 令和6年1月20日(土)～令和6年3月24日(日)
- 会場 企画展示室
- 観覧料 500円(常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・3ページ目をご覧ください。

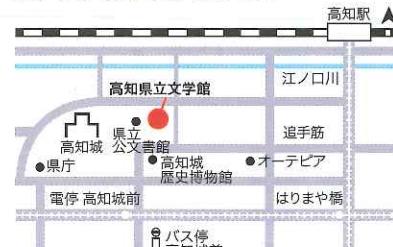


高知県立文学館で開催する企画展。その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休
※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
- 観覧料 常設展一般370円 企画展はそれぞれ異なります。
20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者(1名)、
高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
(窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
- 駐車場 なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
- 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、子どものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
- 運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- JR高知駅から徒歩20分
(またはバス・路面電車を利用)
- バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- 高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」
下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索

